

数理統計学演習問題

学部 組 番 氏名 _____

[1] 以下の定積分を計算せよ.

① $\int_0^2 \frac{3}{4}x^2(2-x)dx$

② $\int_0^\infty e^{-\theta x}dx$ ($\theta > 0$ は定数)

③ $D_1 = \{(x, y) | 0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 2\},$
 $\iint_{D_1} (x+y)^2 dxdy.$

④ $\int_0^{\frac{\pi}{2}} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos x \cos y dxdy$

⑤ $D_2 = \{(x, y) | 0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 2x\},$
 $\iint_{D_2} (x+y)^2 dxdy.$

⑥ $\int_{-\infty}^\infty \int_{-\infty}^\infty (1+x^2+y^2)^{-3/2} dxdy$

[2] $A > 0, B > 0$ は定数とする.

$$\int_0^\infty x^A \exp(-Bx) dx = \boxed{\text{ア}} \Gamma(\boxed{\text{イ}}) \quad (1)$$

ここで $\Gamma(s)$ はガンマ関数. この時, $\boxed{\text{ア}}, \boxed{\text{イ}}$ に入る値を A, B を用いて答えよ. (ヒント: 置換積分 $Bx = y$ を用いる.)

[3] 表が出る確率が $\frac{2}{5}$ の歪んだコインを 3 回振る. 表が出た回数を X とするとき, 以下の問に答えよ.

① $P(X=2)$ を求めよ.

② X の確率分布を求めよ.

③ $E[X]$ を求めよ.

④ $V[X]$ を求めよ.

⑤ 標準偏差 $D(X)$ を求めよ

[4] X の確率密度関数を $f(x) = \theta e^{-\theta x}, (x \geq 0)$ とす

る. ここで $\theta > 0$ は定数.

① $E(X)$ を求めよ.

② $V(X)$ を求めよ.

[5] $X \sim B(n, p)$ とする.

① X の積率母関数 (m.g.f.) $g_X(t)$ を求めよ.

(ヒント: 2 項定理 $(p+q)^n = \sum_{k=0}^n {}^nC_k p^k q^{n-k}$ を用いる.)

② [5]①を用いて $E[X], V[X]$ を求めよ.

[6] X は正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従うとする. このとき,
 $Y = \frac{(X-\mu)^2}{\sigma^2}$ はどのような確率分布に従うか

[7] 確率変数 X, Y は同時確率密度関数を $f_{XY}(x, y)$ を持つ.

① 共分散の計算公式

$Cov(X, Y) = E(XY) - E(X)E(Y)$ を証明せよ.

② X と Y が独立の時, $Cov(X, Y)$ の値を求めよ.

[8] 2 次元確率ベクトル $\begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix}$ は 2 次元正規分布 $N_2(\mu, \Sigma)$ に従うとする.

ここで $\mu = \begin{pmatrix} \mu_1 \\ \mu_2 \end{pmatrix}, \Sigma = \begin{pmatrix} \sigma_1^2 & \rho\sigma_1\sigma_2 \\ \rho\sigma_1\sigma_2 & \sigma_2^2 \end{pmatrix}.$

① $\rho = 0$ とする時, X と Y が独立であることを証明せよ. (ヒント: $f_{XY}(x, y) = f_X(x)f_Y(y)$ を示せば良い)

[9] $f(x) = \sin x$ の $x = 0$ の周りでの (3 次の剰余項を持つような) テイラー展開を求めよ.

[10] $X_1, \dots, X_n$ は互いに独立で, 同一の分布に従う確率変数とする. $E(X_i) = \mu, V(X_i) = \sigma^2, S^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$ とする. この時 $E(S^2)$ を以下の手順で求めよ.

① $E[(\bar{X})^2]$ を求めよ.

② $E\left[\frac{1}{n}\sum_{i=1}^n X_i^2\right]$

③ $E(S^2)$ を求めよ.

(ヒント:①, ②はどこかで分散の計算公式を用いると簡単に求められる)

[11] $X_1, \dots, X_n$ は互いに独立な確率変数とし, $E(X_i^2) = \mu'_2$, $V(X_i^2) = A$, ($i = 1, \dots, n$) $\bar{X}^2 = \frac{1}{n}\sum_{i=1}^n X_i^2$ とする.

① $E[\bar{X}^2]$ を求めよ.

② $V[\bar{X}^2]$ を求めよ.

③ $\bar{X}^2 \xrightarrow{P} E(X_1^2)$ を示すこと. (ヒント:①, ②は μ'_2 , A を用いて表す.)

[12] $X_1, \dots, X_n$ は互いに独立に正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従うとする. ここで $\bar{X} = \frac{1}{n}\sum_{i=1}^n X_i$,

$$Y_1 = \frac{1}{\sqrt{2}}(X_1 - X_2)$$

$$Y_2 = \frac{1}{\sqrt{6}}(X_1 + X_2 - 2X_3)$$

$$Y_3 = \frac{1}{\sqrt{12}}(X_1 + X_2 + X_3 - 3X_4)$$

$$\vdots \quad \quad \quad \vdots$$

$$Y_{n-1} = \frac{1}{\sqrt{n(n-1)}}(X_1 + X_2 + \dots + X_{n-1} - (n-1)X_n)$$

とおく.

① $E(Y_i)$ ($i = 1, 2$) を求めよ

② $V(Y_i)$ ($i = 1, 2$) を求めよ

③ $Cov(Y_1, Y_2)$ を求めよ

④ $Cov(\bar{X}, Y_2)$ を求めよ.

(ヒント:① 実は $E(Y_i) = 0$, ($i = 1, \dots, n-1$) となる. ③, ④は $E(X_i - \mu)(X_j - \mu) = 0$, $i \neq j$ を用いる)

[13] 表が出る確率が p であるようなコインを n 回投げた時の結果を, 互いに独立な確率変数で $X_1, X_2, \dots, X_n$ と表すこととする. ここで X_i は i 回目のコインで表がでれば 1, 裏が出れば 0 という値を取るようにきめる. 即ち

X_i	1	0	計
確率	p	$1-p$	1

n が大きくなるとき, 標本平均 $\bar{X}$ は漸近的にどのような分布に従うか? (ヒント:中心極限定理を用いる)

[14] $X_1, \dots, X_n$ は互いに独立に指数分布 $p(x; \theta) = \theta e^{-\theta x}$ に従う. ここで $\theta > 0$ を未知のパラメーターとする.

この時, θ のモーメント推定量 $\hat{\theta}$ を求めよ.

[15] $X_1, \dots, X_n$ は互いに独立に $p(x; \beta) = \frac{\beta^2}{\Gamma(2)} x e^{-\beta x}$ に従う. ここで $\beta > 0$ を未知のパラメーターとする. この時, β の最尤推定量 $\hat{\beta}$ を求めよ.

[16] $X_1, \dots, X_n$ は互いに独立で, 同一の分布に従う確率変数とする. $E(X_i) = \mu$, $V(X_i) = \sigma^2$, $S^2 = \frac{1}{n}\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$, $S_0^2 = \frac{1}{n-1}\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$ とする. この時, S^2 と S_0^2 どちらが不偏推定量か? また理由も述べよ.

(ヒント:[10] の結果を用いる)

[17] [10] の S^2 において, 以下のことが知られている.

$$V(S^2) = \frac{(n-1)^2}{n^3} \left(\mu_4 - \frac{n-3}{n-1} \sigma^4 \right), \quad (2)$$

ここで $\mu_4 = E[(X - \mu)^4]$.

① S^2 の σ^2 に対する平均 2 乗誤差 $MSE_{\theta}(S^2)$ を求めよ.

② $S^2 \xrightarrow{P} \sigma^2$ を示すこと. (ヒント:マルコフの不等式を用いる)

[18] $X_1, \dots, X_n$ は互いに独立にポアソン分布 $p(x; \lambda) = \frac{e^{-\lambda} \lambda^x}{x!}$ に従うとする. ここで $\lambda > 0$ を未知のパラメーターとする. この時, λ の最尤推定量 $\hat{\lambda}$ を求めよ. また $\hat{\lambda}$ に対する平均 2 乗誤差 $MSE_{\theta}(\hat{\lambda})$ を求めよ.

[19] $X_1, \dots, X_{16}$ は互いに独立に正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従うとする. ここで μ, σ^2 を未知のパラメーターとする. この時, 標本平均 $\bar{X}$ の実現値は 65 で, 不偏分散 S_0^2 の実現値は 81 であった. この時, μ に対する信頼度 95% の信頼区間を求めよ.

1 追加問題

[20] 確率変数 X は正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従っている。この時、 $V[X] = \sigma^2$ となることを示すこと。

[21] 確率変数 X は確率密度関数 $f_X(x) = \frac{3}{4}x(2-x)$, ($0 \leq x \leq 2$) を持つとする。

① 確率変数 Y の取りうる範囲を求めよ。

② $Y = 3X + 2$ とおく時、 Y の確率密度関数 $f_Y(y)$ を求めよ。

[22] 確率変数 X は確率密度関数 $f_X(x)$ を持つとする。

$Y = aX + b$, (a, b は定数) とおく時、 Y の確率密度関数は $f_Y(y) = \frac{1}{a}f_X\left(\frac{y-b}{a}\right)$ となることを示すこと。

[23] 確率変数 X は以下の確率密度関数を持つとする。

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{1}{b-a} & (a \leq x \leq b) \\ 0 & \text{それ以外} \end{cases}. \quad (3)$$

この確率分布を一様分布と言い、 $U(a, b)$ と略記する。

① $E(X)$ を求めよ

② $V(X)$ を求めよ

[24] X の確率密度関数を $f(x) = \theta e^{-\theta x}$, ($x \geq 0$) とする。ここで $\theta > 0$ は定数。この時、 X の積率母関数 (m.g.f.) $g_X(t)$ を求めよ。

[25] 以下の同時分布を考える。

$X \backslash Y$	0	1	計
0	$\frac{6}{20}$	$\frac{6}{20}$	$\frac{12}{20}$
1	$\frac{6}{20}$	$\frac{2}{20}$	$\frac{8}{20}$
計	$\frac{12}{20}$	$\frac{8}{20}$	1

この時、 X と Y の共分散 $Cov(X, Y)$ を求めよ。

[26] X と Y の同時密度関数を

$$f_{XY}(x, y) = \frac{36}{5}xy(1-xy), \quad (0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1)$$

とする。

① X の周辺密度関数を求めよ。

② $E(X)$ を求めよ。

③ X と Y の共分散を求めよ。

2 解答

[20] $z = \frac{x-\mu}{\sigma}$ とおくと

$$\begin{aligned} V[X] &= \int_{-\infty}^{\infty} (x-\mu)^2 \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma} \exp\left(-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}\right) dx \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \sigma^2 z^2 \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{z^2}{2}\right) dz \\ &= \sigma^2 \int_{-\infty}^{\infty} z^2 \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{z^2}{2}\right) dz \end{aligned}$$

ここで部分積分を用いると

$$\begin{aligned} &\int_{-\infty}^{\infty} z^2 \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{z^2}{2}\right) dz \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} -z \left\{ \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{z^2}{2}\right) \right\}' dz \\ &= \left[-z \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{z^2}{2}\right) \right]_{-\infty}^{\infty} + \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{z^2}{2}\right) dz \\ &= 1 \end{aligned}$$

より $V[X] = \sigma^2$ となる。

[21] ① Y の取りうる範囲は $2 \leq Y \leq 8$ である。②

$$\begin{aligned} P(Y \leq y) &= P(3X + 2 \leq y) \\ &= P\left(X \leq \frac{y-2}{3}\right) \\ &= \int_2^{\frac{y-2}{3}} \frac{3}{4}t(2-t)dt \end{aligned}$$

これより、両辺を y で微分すると

$$\begin{aligned} f_Y(y) &= \frac{3}{4} \frac{y-2}{3} \left(2 - \frac{y-2}{3}\right) \cdot \frac{1}{3} \\ &= \frac{1}{36}(y-2)(8-y), \quad (2 \leq y \leq 8). \end{aligned}$$

[22]

$$\begin{aligned} P(Y \leq y) &= P(aX + b \leq y) \\ &= P\left(X \leq \frac{y-b}{a}\right) \\ &= \int_{-\infty}^{\frac{y-b}{a}} f_X(t) dt \end{aligned}$$

これより、両辺を y で微分すると

$$f_Y(y) = f_X\left(\frac{y-b}{a}\right) \cdot \frac{1}{a}$$

よって示せた.

$$[23] \text{ ① } E(X) = \frac{a+b}{2}, V(X) = \frac{(b-a)^2}{12}.$$

$$[24] \quad t < \theta \text{ の時, } g_X(t) = \int_0^\infty e^{tx} \theta e^{-\theta x} dx = \int_0^\infty \theta e^{-(\theta-t)x} dx = \theta \int_0^\infty e^{-y} \frac{1}{\theta-t} dy = \frac{\theta}{\theta-t}. \quad t \geq \theta \text{ の時, } g_X(t) \text{ は発散する. (即ち積分が無限大になる)}$$

$$[25] \quad E(X) = \frac{8}{20}, E(Y) = \frac{8}{20},$$

$$\begin{aligned} Cov(X, Y) &= (0 - \frac{8}{20})(0 - \frac{8}{20}) \frac{6}{20} \\ &\quad + (0 - \frac{8}{20})(1 - \frac{8}{20}) \frac{6}{20} \\ &\quad + (1 - \frac{8}{20})(0 - \frac{8}{20}) \frac{6}{20} \\ &\quad + (1 - \frac{8}{20})(1 - \frac{8}{20}) \frac{2}{20} \\ &= -\frac{3}{50} \end{aligned}$$

[26] ①

$$\begin{aligned} f_X(x) &= \frac{36}{5} \int_0^1 xy(1-xy)dy \\ &= \frac{6}{5} x(3-2x) \end{aligned}$$

これより

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{6}{5} x(3-2x) & (0 \leq x \leq 1) \\ 0 & \text{それ以外} \end{cases}.$$

②

$$E(X) = \int_0^1 x \frac{6}{5} x(3-2x) dx = \frac{3}{5}$$

③

$$\begin{aligned} E(XY) &= \int_0^1 \int_0^1 xy \frac{36}{5} xy(1-xy) dx dy \\ &= \frac{3}{5} \int_0^1 (4y^2 - 3y^3) dy \\ &= \frac{7}{20}. \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{共分散の計算公式より } Cov(X, Y) &= \frac{7}{20} - \frac{3}{5} \cdot \frac{3}{5} = \\ &= -\frac{1}{100}. \end{aligned}$$

参考文献 鈴木 武, 山田作太郎 (1996) 数理統計学, 内田老鶴圃. 変数変換, t 分布の導出の仕方が最も標準的

な方法で書かれている. ただし最初の確率測度, 特性関数の説明で初学者にとってはきついので, 飛ばして読むと良い.

$$[1] \text{ ② } \frac{1}{\theta} \text{ ③ } \frac{16}{3} \text{ ④ } \frac{13}{6} \text{ ⑤ } 1. \text{ ⑥ } 2\pi$$

たたみこみ

連続型確率変数 X と Y は独立とする. この時,
 $U = X + Y$ の確率分布は

$$f_U(u) = \int_{-\infty}^{\infty} f_X(x)f_Y(u-x)dx$$

(X, Y が離散型のとき,

$$f_U(u) = \sum_x f_X(x)f_Y(u-x)).$$

PROOF.

$$P(U \leq u) = P(X + Y \leq u)$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ \int_{-\infty}^{u-x} f_{XY}(x, y) dy \right\} dx$$

$x + y = t$ とおくと

$$= \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ \int_{-\infty}^u f_{XY}(x, t-x) dt \right\} dx$$

x と y は独立より

$$= \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ \int_{-\infty}^u f_X(x)f_Y(t-x)dx \right\} dt$$

これより

$$f_U(u) = \frac{d}{du} P(U \leq u) = \int_{-\infty}^{\infty} f_X(x)f_Y(u-x)dx.$$

注意 微分積分の基本定理 $\frac{d}{du} \int_{-\infty}^u h(t)dt = h(u)$ を
 用いた.

p77 積率母関数に関する定理

- $g_X(\theta) = E(e^{\theta X})$: X の積率母関数
- $g_Y(\theta) = E(e^{\theta Y})$: Y の積率母関数
- $g_U(\theta) = E(e^{\theta U})$: $U = X + Y$ の積率母関数

X, Y が独立のとき,

$$g_U(\theta) = E(e^{\theta(X+Y)}) = g_X(\theta)g_Y(\theta).$$

PROOF.

$$\begin{aligned} g_U(\theta) &= \int_{-\infty}^{\infty} e^{\theta u} f_U(u) du \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} e^{\theta u} \int_{-\infty}^{\infty} f_{XY}(x, u-x) dx du \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \left(\int_{-\infty}^{\infty} e^{\theta u} f_{XY}(x, u-x) du \right) dx \end{aligned}$$

$u - x = y$ と置くと

$$= \int_{-\infty}^{\infty} \left(\int_{-\infty}^{\infty} e^{\theta(x+y)} f_{XY}(x, y) dy \right) dx$$

X, Y は独立より

$$\begin{aligned} &= \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} e^{\theta x} f_X(x) e^{\theta y} f_Y(y) dx dy \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} e^{\theta x} f_X(x) dx \int_{-\infty}^{\infty} e^{\theta y} f_Y(y) dy \\ &= g_X(\theta) g_Y(\theta) \end{aligned}$$